



絶滅したと思われていたミズナギドリの希少種を小笠原諸島で再発見 —世界自然遺産に生き残っていた希少鳥類—

ポイント

- ・ これまでに世界に2例しか記録がなく、絶滅を疑われていたミズナギドリの仲間、ブライアンズ・シアウォーターが小笠原諸島に生き残っていることが確認されました。
- ・ このような再発見の例は、日本では約60年前のアホドリ以来のことで、世界遺産としての小笠原の価値と保全の重要性を高めるものです。
- ・ この鳥の和名を、オガサワラヒメミズナギドリとすることを提案します。

概要

ブライアンズ・シアウォーター（英名）は、ミッドウェイ諸島で1963年に採集された標本に基づいて発表された種ですが、最初の発見以来、ミッドウェイでもう一度だけ見られた以外に記録がなく、すでに絶滅したかもしれないと心配されていました。しかし、小笠原諸島で1990年代以後に見つかった6個体の小型のミズナギドリのDNAと形態を分析したところ、ブライアンズ・シアウォーターと同種であり、現在も小笠原に生き残っていることが分かりました。

今回の発見は、2011年に世界自然遺産として登録された小笠原諸島の生態系が極めて高い価値を持つことを改めて示しており、これまでの外来種対策の研究や駆除事業の重要性を示すものです。今後は、さらに積極的に保全していく必要があります。ブライアンズ・シアウォーターの和名として、小笠原に生息する小型のミズナギドリという意味で「オガサワラヒメミズナギドリ」とすることを提案します。この成果は現地時間の2月8日にハワイで行われる太平洋海鳥会議で発表される予定です。

予算：環境省地球環境保全等試験研究費

「小笠原諸島における帰化生物排除後の森林の順応的管理方法の開発」

問い合わせ先など

独立行政法人 森林総合研究所 理事長 鈴木 和夫
研究推進責任者：森林総合研究所 研究コーディネータ 牧野 俊一
研究担当者：森林総合研究所 野生動物研究領域
鳥獣生態研究室 主任研究員 川上 和人
広報担当者：森林総合研究所 企画部 研究情報科長 荒木 誠
TEL：029-829-8130 FAX：029-873-0844

本資料は、林政記者クラブ、農林記者会、農政クラブ、環境省記者クラブ、筑波研究学園都市記者会に配付しています。

背景

1963年にミッドウェイ諸島で小型のミズナギドリが採集され、その標本は既知のヒメミズナギドリのものとして保管されていました。しかし、DNA分析の結果から、この鳥は新種であることが分かり、2011年にブライアンズ・シアウォーターという英名で発表されました。この鳥は、その後同じミッドウェイ諸島で1990年代初頭に観察されているだけで、すでに絶滅している可能性も心配されていました。一方、2011年6月にユネスコにより世界遺産として登録された小笠原諸島では、種類が判定できない小型のミズナギドリが見つかっていました。この鳥は暫定的にヒメミズナギドリとされていましたが、正体は不明でした。

結果

問題の小型ミズナギドリは、1997年以後に有人島の父島、母島で各1個体、2つの無人島で4個体、合計6個体が見つかっていました。このうち5個体は死体で発見されましたが、1個体は衰弱して保護された(写真1)後に死亡しており、全て標本として保管されていました。この6個体の標本について、ミトコンドリアDNAの分析を行ったところ、全個体がブライアンズ・シアウォーターのDNAと一致しました。また形態的にも、近縁の種に比べて体が小さく尾羽が長いという特徴を持っており、ブライアンズ・シアウォーターと一致していました。

小笠原ではミッドウェイに比べて多くの個体が見つかることから、この鳥の主な生息域は小笠原諸島だと考えられます。無人島でこの鳥が見つかった場所は、低木林や丈の高い草の下で多数の海鳥が繁殖している場所でした。営巣はまだ確認されていませんが、同様の環境で繁殖している可能性があります。最も新しく見つかった個体は、2011年5月のものだったことから、この鳥は現在まで小笠原諸島に生き残っているということがわかりました。

この鳥がこれまでに見つかるのは12月から5月までの期間なので、冬に繁殖すると考えられます。小笠原諸島では冬は海が荒れるため研究者が無人島に渡るのが難しく、このことがこの鳥の発見が遅れた理由と考えられます。

小笠原で見つかったとはいえ、この鳥の個体数は極めて少なく、現在もなお世界的な希少種であることは間違いありません。過去に無人島で見つかった個体のうち3個体は、外来種であるクマネズミに捕食されて死んだものと考えられました。小笠原諸島では、クマネズミによる海鳥の捕食が問題になっており、森林総研ではクマネズミの根絶手法を開発しました。小型ミズナギドリの死体が見つかった無人島でも、他の海鳥が多数捕食されていたため、環境省によりネズミ類の駆除が行われました。このため、この島ではネズミによる脅威の心配はなくなりました。しかし、この鳥が繁殖することができる環境を増やすためには、ネズミが侵入している他の無人島においても駆除を推進していく必要があります。また小笠原諸島では、海鳥の繁殖地の環境を悪化させるモクマオウなどの外来植物の繁茂が問題になっていることから、林野庁などで実施している外来植物の駆除を推進することにより、海鳥の繁殖地となっている固有の森林生態系の修復や管理を行うことが必要です。

この鳥は、ヒメミズナギドリと形態的に似ていることから、関係者の間ではオガサワラヒメミズナギドリと呼んでいました。小笠原に生息する小型のミズナギドリという意味で、この名称を本種の和名とすることを提案します。

結果の活用

世界的な希少鳥類が小笠原諸島において生き残っていることがわかりました。絶滅を疑われていた鳥類の再発見は、国内では約60年前の伊豆諸島鳥島におけるアホウドリ以来のことで、生物多様性の保全上とても有意義なことです。世界自然遺産として登録された小笠原の生態系の価値をさらに高めることになるでしょう。今後、本種を早急にレッドリストに掲載し、積極的な保全を図る必要があると考えられます。また、生態にはまだ不明点が多いため、保全に必要な情報を得るための調査をおこなっていく必要があります。小笠原諸島では、森林総研を始め多くの研究機関により、外来生物の影響や対策手法が科学的に研究され、林野庁や環境省、東京都などの事業に反映されてきました。今後も世界自然遺産の価値を保全するための研究と、これに基づく事業を行っていく必要があります。特に現在行われている外来ネズミ類などの駆除事業を今後も推進することは、この鳥を保全するための有効な手段であると考えられます。また、無人島における生態系管理の必要性を支持する結果と言えます。

用語の解説

・ミッドウェイ諸島

ハワイ諸島の北西部に位置する島々で、第二次世界大戦時には島全体が軍事基地として利用された。戦後は国立自然保護区とされ、コアホウドリやクロアシホウドリなどの海鳥が多数繁殖している。小笠原諸島から約4000キロ離れているが、繁殖している海鳥には共通の種が多い。

・ヒメミズナギドリ

大西洋および太平洋南部の亜熱帯から温帯地域で繁殖する小型のミズナギドリの仲間。以前は1種とされていたが、最近では生息する地域ごとに別種として考えられるようになってきた。日本では、今回オガサワラヒメミズナギドリであることが判明した個体以外には、確実にヒメミズナギドリと識別された記録はない。

共同研究機関名

小笠原自然文化研究所、鳥取大学、山階鳥類研究所

本成果の学会発表

学 会 名：第39回太平洋海鳥会議

開 催 日：2012年2月7日(火)～10日(金)

開催場所：ハワイ州オアフ島

発 表 名：Bryan's Shearwaters have survived in the Bonin Islands, Northwestern Pacific!

(ブライアンス・シアウォーターは、小笠原諸島で生き残っていた！)

図、表、写真等



写真1 小笠原諸島父島で見つかったオガサワラヒメミズナギドリ
(撮影/小笠原自然文化研究所)



写真2 オガサワラヒメミズナギドリの死体が発見された無人島の環境



写真3 クマネズミによって捕食されたオガサワラヒメミズナギドリの羽毛と骨